

では警察官の干渉さへある程であります。其の爲に我國から輸出する苗木等の全部送還或は火の下に焼却せらるゝ如き災厄に遭ひし事さへあるのでありますから、是等は國民一般に其知識を行使せしめて將來我等の好む果樹の栽培上に好結果を來させたいと存じます。

松の話

礫川生

松は目出度いものである。

也有の十七字詩に「松風の里どこ迄を門飾」。また去來に「月雪の爲めにもしたし門の松」。幸田草臣の和歌に「宿毎に立て渡したる今朝見れば都も松の木の間なりけり」とある。又松は獨り新年のつきものであるのみでなく、松と月とは實に配合の極致と云つてもよい。此の二つのものを巧にとら

へ來つたのは其角で「名月やたゝみの上に松の影」と云ふ句は三尺の童子でも知らない者ははない。蓼太の「名月や生れかはらば峯の松」と云ふのもその類である。

抑も松は何故に芽出度いか、古來松に對し悲觀的な歌や俳句がないでもないが、十中九分通り迄は皆芽出度きしるしとなしてゐる。朝早く海岸の松原を散歩した人は、一種云ふ可らざる愉快を感じるのであらう、松はたゞに常緑樹たるから芽出度いのみでなく、松より出づるもの人間に有功なる物質があつて人の齡を伸ぶるから芽出度いのであらうと思ふ。古來公孫樹の下にては子は育たず。高砂のおぢいさんおばあさんが、松の傍に立つてゐるのも大に意味のあることだと思ふ。

偕前提が甚だ長くなつたが、新年に因みのある松につき少し述べて見度いが松は *Gymnos zemaiae* の *Coniferales* の *Pinales* に屬するといふ類のことは暫くぬきとして愛玩用としての松に就て少しの

べて見やう。

近來は園藝と云ふ事は非常に流行して來た。殊に盆栽は津々浦々に到るまで、文人墨客ならずとも愛玩する人のふへたのは甚だ喜しい事である。盆栽には種々なる樹を用ふる事が出来る。然し其中尤なるものは松と柏に及ぶものはない。柏は殆ど近來の流行であるが、松は天保時代頃から各地方に於て採掘され愛玩せられたものである。一體盆栽なるものは日本固有の術とも云ふべく、亭々として雲表を摩する老松の姿を、僅か尺にたらざる盆裏にあらはすのであるから其の妙味は又格別である。従つて盆栽に用ふる植木鉢の如きも、方圓種々あり、模様色彩その妙を盡し、特に支那製を愛玩するが、西洋では植木鉢の如きは到つて粗末なものである。彩色の代りに色紙で覆ふ位のもので、樹木にあれ花奔にあれ、生長をたすけて花は主として剪花として賣るのである。その代り花壇の發達は著しきもので、美しい瀬戸物で

その縁をとる事などもある。借て又語が他岐に入つたが、盆栽としての松はいかなるものであるかと云ふに、普通赤松、黒松、五葉松、錦松、枝垂松等である。總じて雄松と稱するのは、樹幹粗にして葉は太く硬い。之に反して雌松と唱へるものは、樹幹滑かにして葉は細くこまかい。枝垂松は誰も知つてゐる通り枝が垂下する性のあるもので五葉松は五葉簇生するものである。錦松と云ふのは、樹幹の外皮が大に發達して、殆ど内部の肉が無いやうなものである。之れは枝振りの面白いのよりも外皮の奇なるを賞玩するので、培養には困難であるから素人向きのものではない。松の産地は日本國中には甚だその數が多くあるが、茨城縣下及關西では姫路の紅肌の雌松及淡路島の淡路松は雄松で賞賛される。一寸斷つて置きたいのは、盆栽などと云ふ事は決して一朝一夕の仕事ではない、數年数十數年を苦心に苦心を重ねなければならぬ。従つて茲に容易にその充分なる事を説

明する事は出来ないが、もし庭の片隅なりにとも松を栽培して見やうとの御考へのある方の御参考にもなれば非常なる幸である。

松の栽培

先づ山又は海濱いづ方よりなりとも松の新木を探り來つて假畑又は假鉢に植へ込むのである。成可くは直ちに、假鉢に植へる方がよろしい。其の時は、陰曆の二月より三月であつて松の緑が漸く二分か三分に伸びた時である。古來此の時季をば「松の投植」と云ふ位であるから百發百中めつたに枯れるやうな事はない。

そして植ゆる時は、豫め天候を見て降雨のありそふな前日に植へるのがよい。成可くは前年に根の周圍に鋤を入れ、牛蒡根とて垂直に下つてゐる太い根を多少切りをき、翌年春中旬とるのがよい之れを根廻しと云ふのである。

植土

松は一體あまり肥沃なる土地でなくとも、充分に

發育するものであるから従つて植土の如きも、大して撰ばない。赤松亡國と云ふやうな説も聞いたが、議論は抜きとしても兎に角不毛の地にても松は成長する。先づ赤松なれば山の土に砂三分の一黒松なれば山の土に眞土半々に砂を三分の一加へる。一體植物はそのものの生育して居た場所の土壤をとり來り植ゆるのがよい。之れは獨り松に限らず、凡ての植物がさうである。

肥料

いかに松は瘠地を好むとは云へ、方尺にも足らざる鉢の中に培養するのであるから時折りは肥料を與へるがよい。肥料は一般の盆栽肥料で充分である。又は油滓を水に混じその腐敗せるを用ゆるもよい。あまり松の葉が長く伸び過ぎ軟かになつたらば、砂を多量に加へた鉢に移植するがよろしい。砂の多い盆栽には灌水を怠らぬようにしなければならぬ。肥料は春秋彼岸前後に施すがよい。

灌水

松は一凡に乾燥した方を好むものである。灌水の場合注意すべきは上より水をかけてはいけない。如露の口の小さなものを以つて根の周圍にそゞぎかける、もし葉や枝を水で洗つた場合には、日あたりよき風とうしよき所で乾かさなければならぬ雨水にあてゝも半日以上雨水に晒すのはよくない

移 植

松は新根の發生や、少なきものなる故、三年目もしくは四年目に一回移植すれば充分である。その場合には網の如く生じたる小根を半分以上缺でとりさり、よく掃除してもし腐敗したる部あらば、丁寧にとりさり植ゑる、季節は前にも述べた如く新暦の三四月及び九月下旬より十月末までい、あまり寒暑の烈しい時は手をつけてはならぬ。松を盆栽に仕立てる場合に、始めから牛蒡根を切りする時は枯死するから移植する度毎に牛蒡根を切りちいめてゆかねばならぬ。

松の手入

松は總じて強健なものである。寒風凛烈なる時にもいつも緑の色さいくとしてゐる。所謂雪にも霜にも恐れざるものであるから一月頃と雖も温暖なる室内に置く必要はない。と云つて盆栽のものは特別に寒氣にあてなくてもよい南向の椽などに置くのが一番である多く水をやるのは根を腐敗せしむる原因である。四月春暖になれば芽をふき風致を害する。あらかじめ灌水を節し又は移植するとよろしい、若松にあつては生長も盛なものであるから四月より七八月にかけて、松の枝振りを損じないやうに心掛けなければならぬ。即稍頭より緑を抜いた時は、緑の僅か伸長した時に、指頭で半分位つみとり置く時は葉が生じても長くない然らざれば葉が大に生長し六七月頃には見苦しきものとなる。老松はさまで發育するものでないが日光の直射する所に置き灌水を減じ日中緑の垂る位にしてをく。芽を摘むのは八十八夜頃よりな

すが適當である。九月頃よりは松の古葉を取り去る、指頭を以て葉を逆に引くと容易にとれる。

十一月頃もやはり古葉の掃除を怠らず。汲み置きの水を與へる、十二月頃になつたらばはや南向きの椽先などに置くのがよい。

松の病

松はやゝもすれば枝葉の枯死せんとするものである、斯る場合には貝殻の粉末を一に水五の割合にて養つめ用ゆる。葉に斑點生じ又は柔軟となり又は黒き煤の如きもの附著する時、又は葉根に水泡の如きもの生ずる時には、川灸をよく煎じて洗ふ。又木虱が発生した場合には、テレピン油を塗る。烟草の煎汁をそゝぐとよい。

盆栽の種類

直幹 樹身が眞直に立つもので幹の太き拇指位高さ數寸位のものはい調和である。

双樹 俗に相生と稱するもので、一つの根より二本の幹が生じたるものである、普通は二本

寄植

の木を寄せて植へ數年の後恰かも双樹の如く見するのが多い。

一盆の中に種々なる數株を植ふる森林の趣きをあらはすもので素人向きでない至難のものであるが要するに幹と幹とが互に正面から見て重ならぬやうに注意し、葉間より樹幹が隠見するのがよい、一體寄植るは必ず奇數と限る人もあるが必ずしも偶數では悪いと云ふ事はなからうと思ふ。

千本松と云ふのは實生林とも云ふ位いで、松の實からまいて松の小さい林を模するものである。その方法は秋松の實の充分熟したるを採り來り、直ちに地下に埋め、翌春の彼岸頃鉢に肥土をもちて之に蒔きつけ、たへず灌水に注意すれば、入梅頃芽を生ず但し實の熟不熟により芽の出方に大に遅速がある、偕てかく芽が生じたら二年目位までは充分に肥料を與へ、三年目位より大に加

懸崖。松は直幹を賞すれども、中々直幹の優等なるは得難く、近來は懸崖を愛玩する、即ちの名の表す如く、斷崖絶壁より舞ひ下る姿である。半懸崖として横に出でたるもある。

石附。岩石の上に樹の生じたる所を樸すので水盤などに入れて妙である、石附根洗として根が固く石を抱くのに妙味がある、根洗に仕立てる方法などあれど省略する。

植木鉢

植木鉢は素焼のものが第一である、下の孔塞げには瀬戸物の破片を用ゆるがよい、地上に一つ所に長く置く時は、下より蚓蚯など這上るから成可くは棚をつくり列べて置くのがよい。然し素焼のは御座敷用とならぬので種々な贅澤な品があるが品質はをきてたいその色と形につき二三述べて見やう、盆の色は普通、赤、白、黒、青、黄、である。青い鉢には松、柏、白梅等、赤い鉢も同様

である。白い鉢には、松、紅梅、樅の如きものが配合がよい。形は第一に碗形又は方形の少し深きもの、これはや、小高き丘とも見るべく、直幹、懸崖、半懸崖、等に用ゆ、第二は長方形で上方の開きしもの又は筒形のもの、これは懸崖に用ゆ、第三は、薄い圓形、橢圓形又は長方形の平盆である、之れは直幹、双樹、寄せ植等に用ゆる、盆中の位置は一概にはゆかぬが、大凡鉢の中央より稍後方の左か右に寄つた方に定める、之は自然の數でかくするのが一番收りがよいのである。

▲冬の用心▼

ストーブから瓦斯が漏れては居ぬか。子どもが臭いといふ様になつてから、やつと氣がつく様のことでは遅い。かつかと火鉢の炭火をおこして、室内がもつとして居ぬか。換氣の設備を伴はぬ暖室の設備は、差引勘定零る悪い。

室内が寒すぎはせぬか。又その反對に熱すぎはせぬか。空氣が餘り乾燥し過ぎては居ぬか。此三すきは皆感冒のもとになる。保育室には必ず正確な寒暖計を備へよ。但し保育室の寒暖計は裝飾ではない。絶えず注意して温度を檢べよ。